

I 美術を通じた交流を促進する

【集客・交流推進】

① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。

〔広報〕

		(22年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・年間観覧者数10万人	A	A	
小林委員長	A			
柏木委員	A	・沿岸に立地する美術館であるので、震災の余波による影響が懸念されたが、目標をうわまわったことは評価できる。		
菊池委員	A			
久保委員	A			
黒岩委員	A	・年間観覧者数が初年度を除き、最も多い数値となったことは評価できる。 ・来館者別にみると、リピーターの割合が増えると共に市内の来館者数が増え、市民の美術館という意識が定着している点が評価できる。特に10代の来館者数が増加している点は、子どもたちを対象とした教育普及事業の効果であると考えられる。 ・都内の来館者数が大幅に減っている。都内で様々な美術展が開催されている点を考えると、横須賀まで足を運ぶ魅力や付加価値をさらにアピールするすると共に、広報活動の工夫も必要であると考えられる。		
小島委員	A	・開館年度を除き、毎年年間観覧者数は10万人前後で推移しており、本年度も設定目標をクリアしている。		
原田委員	A	・来館者の年代が分散しているデータから、様々な年代の人に楽しんでもらえているのではないかと。		

実施目標	・広報、パブリシティ活動を通じて、広い層に美術館の魅力をアピールする。	(22年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
柏木委員	A	・美術館で独自にツイッターなどのソーシャル・メディアの活用に取り組んではいかがか。		
菊池委員	A			
久保委員	A			
黒岩委員	A	・情報掲載数が前年度を上回っていること、他部課や外部団体との連携も積極的に行っている点は評価できる。これからも、ドラマや観光施設、併設レストラン等とコラボレーションを図り、より一層、美術館の魅力をアピールしていく工夫を行ってほしい。 ・学校への広報活動はかなり有効である。長期休業期間とリンクさせる等、子ども向けちらしの配布を積極的に行ってほしい。 ・有料広報活動については、費用に見合った効果が得られているのかを検証し、今後につながる効果的な広報活動を行う必要がある。		
小島委員	A	・各展示会への来場が多く見込まれる年齢層を見据えた広報、パブリシティ活動が功を奏した。(トリック&ユーモア展での子ども向けチラシ作成、配付など)		
原田委員	A			

②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。

[市民協働]

達成目標		(22年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
柏木委員	A	・ボランティア活動への市民の参加が着実に増加し、定着している。		
菊池委員	A			
久保委員	A			
黒岩委員	A	・市民に親しまれる美術館をめざし、ワークショップやイベント等で、ボランティア登録者と一般参加者を含めた参加者数が過去最高の数値を示したことは評価できる。こうした活動が市民に親しまれる美術館像をつくりあげていく。美術館に関心をもたない市民や親子の興味をひくイベントが裾野を広げることになる。また、そうした取り組みが企画展への興味にもつながると考える。 ・プロジェクトボランティア登録者19名、サポートボランティア登録者28名であるが、さらに登録者を増やすための広報活動と、研修の充実をお願いしたい。		
小島委員	S	・過去2年の参加数から本年度は200人強増加。		
原田委員	A			

実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ふだん美術館に関心を持たない層を含めた市民が、美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。 ・市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。 	(22年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
柏木委員	A	・ボランティア登録者を増やすことは一つの指標ではあるが、評価基準にはなりがたいのではないか。		
菊池委員	A			
久保委員	A			
黒岩委員	A	<ul style="list-style-type: none"> ・様々なイベントを開催することで市民に親しまれる美術館となってきた。特に小学校6年生を対象とした美術館鑑賞会は児童に美術を通して豊かな感性を育むと共に、美術館に足を運ぶきっかけとなっている。今後も充実した取り組みをお願いしたい。 ・市民が美術館を内側からサポートするボランティアのシステムが確立されていることはたいへん素晴らしいことだ。美術を愛好する市民が、進んで美術館のボランティア活動に関わることで、自らの喜び、生きがいとなる場をこれからも保障すると共に、広げていってほしい。 		
小島委員	A	・サポートボランティアが活動の際、揃いのTシャツなどを着用すると、士気を鼓舞し、達成感を促す効果を生むのではないだろうか。		
原田委員	A	・合唱団の加わる事業など、美術館が広がりのある活動拠点となった。		

Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める

【社会教育】

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。

〔展覧会・教育普及〕

達成目標	・企画展の満足度(補正值)70%	(22年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
柏木委員	A	・アンケートのサンプル母数を増やしていくことが課題ではないか。		
菊池委員	A			
久保委員	A			
黒岩委員	A	<ul style="list-style-type: none"> ・企画展の満足度が80%を越え、開館以来最高の値を示したことは、大いに評価できる。 ・企画展の内容では、夏休みに開催した「集まれ！おもしろどうぶつ展」が三沢厚彦の作品など、親子にとっても親しみやすい内容であり満足度も高かった。また、「トリック&ユーモア展」は、エッシャー、マグリットという誰もが一度は聞いたことのある作家の作品とその展示方法の工夫が満足度を上げると共に、23年度最多の観覧者を動員する魅力につながったと考える。 ・音声ガイドやワークシートの活用など知的好奇心を満足させるためのアイテムの工夫を今後も検討してほしい。 		
小島委員	S	・企画展の満足度の設定目標を10%以上超えている。		
原田委員	A			

実施目標		(22年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A			
柏木委員	A			
菊池委員	A			
久保委員	A			
黒岩委員	A	<ul style="list-style-type: none"> ・企画展の満足度と観覧者数は必ずしも比例しない。一般市民の期待する内容と美術館としての独自性に基づく内容とを年間バランスよく計画する必要がある。特に一般市民を対象とした内容の充実が、満足度と共に観覧者数の増加につながる。 ・企画展とタイアップした様々な講演会やワークショップの充実は目を見張るものがある。今後も充実した取り組みを期待する。 ・図書室の利用の便を図るためには駐車料の減免処置が必要である。1時間程度の無料化の検討をお願いしたい。また、夏休み期間中の利用者数が多い。学生が夏季課題のレポート作成等に利用するのであれば一部資料の貸し出しも検討してほしい。 		
小島委員	A	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会関連のワークショップで、終了時に参加者の感想やアンケートの実施はなされているか。また、その内容から毎回ワークショップの費用対効果を考察すべき。 		
原田委員	A	<ul style="list-style-type: none"> ・展示の工夫で、美術の裾野が広がり、市民と美術館の距離が縮まった。 		

④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。

[若年層への教育普及]

		(22年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・中学生以下の年間観覧者数15,000人	A	S	
小林委員長	S			
柏木委員	S	・学校との連携が定着しつつあることは評価できる。		
菊池委員	S			
久保委員	S	・すべての年齢層で増加していることは素晴らしい。		
黒岩委員	S	・達成目標を大きく超え、開館以来もっとも多い観覧者数となったことは大いに評価できる。 ・特に夏休み期間中の観覧者数の増加は、目を見張るものがある。夏休みは時間的な余裕があり、保護者と共に来館するには最適な時期である。今後も、児童・生徒の興味をひきつける企画展の開催とちらし等による広報活動をお願いしたい。 ・児童生徒造形作品展は、広く市民に認知される作品展となり観覧者数も安定している。また、横須賀市の造形教育に果たす役割も大きい。今年度はインフルエンザの流行時期と重なり、やや観覧者数が減少したのを残念に思う。		
小島委員	S	・子どもたちにとって、興味がわく展覧会の企画により、観覧者数の伸びにつながった。		
原田委員	A			

実施目標		(22年度)	1次評価	2次評価
			A	A
小林委員長	A			
柏木委員	A			
菊池委員	S			
久保委員	A			
黒岩委員	A	・美術館における児童生徒造形作品展の開催は、市民の美術館として、子どもたちに形と色をとおした豊かな心を育む教育を行うというメッセージの表れである。今後も、より一層、学校と美術館とが連携を深め、造形教育の充実を図ってほしい。 ・学校における事前の図画工作科・美術科の鑑賞授業を受け、美術館における鑑賞会で実物の作品とであった感動や知的好奇心を高め、より学びの充実を図るために、横須賀美術館のアートカード作成について、検討をお願いしたい。 ・展覧館に関連したワークショップ等、子どもたちを対象としたプログラムが充実している。今後もさらなる充実をお願いしたい。		
小島委員	A	・学習プログラムとして、構図が素描向きの作品を何点か選び、児童、生徒たちが模写を行う取り組みはいかがだろうか。		
原田委員	A	・学校はシステム化されているので連携すれば、合理的に効果が拡大するが、むしろインターネットの直接的な呼びかけ等で、引きこもっている若年層に美術館を利用する機会を作ってほしい。		

⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。

[収集管理]

		(22年度)	1次評価	2次評価
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。 ・適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。 ・計画的に所蔵作品の修復を行う。 ・所蔵作品がひろく価値を認められ、他の美術館等で開催する企画展などに活用されている。 	C	C	
小林委員長	C			
柏木委員	C	<ul style="list-style-type: none"> ・多額でなくても基金への充当を市に働きかけ、中期的な展望で美術品の購入に取り組めるようにすべき。 		
菊池委員	F			
久保委員	F			
黒岩委員	C	<ul style="list-style-type: none"> ・作品購入費が予算化されず、寄贈、寄託に頼っている点は残念である。美術館としてコレクションの充実を図る意味で予算化を図っていきたい。 ・公共施設の節電に向けた対応は良く分かるが、作品保存の観点から空調等の管理は慎重に行ってほしい。 ・所蔵作品の活用については、他機関に18件貸し出した点は評価できる。所蔵作品の質の高さが窺える。 		
小島委員	C	<ul style="list-style-type: none"> ・作品購入にあたり、県下の他の美術館との共同購入は難しいか。 		
原田委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・達成目標がないというのがむしろ特徴的なものかもしれない。 		

Ⅲ訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する

【運営・管理】

⑥利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。

[メンテナンス・来館者サービス]

		(22年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・館内アメニティ満足度80% ・スタッフ対応の満足度80%	B	B	
小林委員長	A	・「スタッフ対応の満足度」は確かに80%を割っているが、もう一つの要因「館内アメニティ満足度」が90%に達しているので、達成目標に到達しているとみていいのではないかと。人によっては「館内アメニティ」をスタッフを含めた形で評価する人もいます。		
柏木委員	B			
菊池委員	B			
久保委員	B			
黒岩委員	B	・館内アメニティの満足度90.4%は見事な数字である。明るく開放的で清潔感のある美術館という印象を利用者に与えている。特に限られた人員の中で、トイレ等の清掃が行き届いている。 ・スタッフ対応の満足度78.5%という数字は、やや残念ではある。しかし、展示監視業務もあることを考える、単なるサービス業務だけではないだけに、いたしかたないのではないかと。さらなるサービス向上に心掛けてほしい。		
小島委員	B	・全般的に館内の快適性は保たれていると思われる。		
原田委員	A			

実施目標		(22年度)	1次評価	2次評価
		C	B	
小林委員長	B			
柏木委員	B			
菊池委員	B			
久保委員	B			
黒岩委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・屋外テントの設置や周辺マップの作成等、美術館を中心としたレジャースポットとしての魅力を高める努力がなされている。 ・付帯施設との連携という意味で、企画展コラボメニューやオリジナルグッズの販売、また繁忙期における移動販売車によるケータリング(18回実施)の実施等、アイデアを生かしてサービスの向上に努めている。今後もこうした取り組みを継続してほしい。 ・東日本大震災を受け、津波への対応等、防災対策がいま求められている。特に、美術館鑑賞会等、多くの子どもたちが、来館している場合も多い。実際に避難誘導訓練の実施や災害時の物資の備蓄等、今後検討していく必要がある。 		
小島委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・地下階に停電時の誘導灯や非常灯は設置してあるか。 		
原田委員	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ケータリングカー誘致などの工夫があった。 		

⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える。

[バリアフリー]

		(22年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・福祉関連事業への参加者数のべ200人	S	B	
小林委員長	B			
柏木委員	B			
菊池委員	B			
久保委員	B			
黒岩委員	B	・東日本大震災の影響で大きなイベントが中止となってしまう参加者数が達成目標を下まわってしまい残念だった。毎月開催されている障害者を対象としたワークショップ「みんなのアトリエ」は、定員に見合った参加者が集まっている。リピーター率が高いという指摘がある中、新たな内容を取り入れる努力を今後もお願いしたい。		
小島委員	B	・震災の影響での催しの中止が参加者数減少の要因として認識されている。		
原田委員	B			

実施目標		(22年度)	1次評価	2次評価
		A	B	
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらう(環境づくりの)ための各種事業を行う。 ・必要に応じて、対話鑑賞等の人的サポートを実践する。 			
小林委員長	B			
柏木委員	B			
菊池委員	B			
久保委員	B			
黒岩委員	B	<p>・障害者、高齢者、小さいお子さんを抱えた夫婦への対応等、きめ細かい配慮がされている。障害者施設、高齢者施設、養護学校の受け入れも10回に渡って行われている。また、託児サービスも受託人数は少ないが、定期的に行われている。視覚障害者を対象とした対話鑑賞サービスも行われている。今後、こうしたサービスの周知を図ると共に、需要に見合ったサービスを提供していくことが、すべての人々に親しまれる美術館を具現化する上で大切だと考える。</p>		
小島委員	B	<p>・障害者(児)は障害の種類(部位)や程度によって、美術館利用のニーズが多様であると思われる。今後も課題が残る。</p>		
原田委員	B	<p>・障害者地域作業所で日々活動している方々を招き美術館体験してもらえるような機会があるといい。</p>		

⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する。 〔経営的視点〕

達成目標		(22年度)	1次評価	2次評価
		—	A	
達成目標	・美術館全体で年間に使用する電力量を前年比△5%とする。 ・管理事業にかかる年間消耗品費執行額を予算の△10%とする。			
小林委員長	A			
柏木委員	A			
菊池委員	B			
久保委員	B			
黒岩委員	A	・東日本大震災を受け、節電に向けた様々な努力については十分評価できる。電力量△3.4%は、美術館を維持する上でぎりぎりの数字であると考え。 ・年間消耗品費執行額△6.5%は、職員が一丸となって経費削減に向けた努力の結果だと考える。こうした職員一人ひとりの高い節約意識が、美術館の経営を陰で支えていると感じる。		
小島委員	A	・風力や太陽光発電などの再生可能エネルギーの利用状況は？		
原田委員	A			

実施目標	・職員すべてが費用対効果をつねに意識し、効率的な支出を行う。	(22年度)	1次評価	2次評価
		B	B	
小林委員長	B			
柏木委員	B			
菊池委員	C			
久保委員	B			
黒岩委員	A	・職員一人ひとりが費用対効果を意識し、サービスの質を落とさずに、経費削減に向け努力してきたことがよく分かる。しかしながら現実的にその取り組みもぎりぎりの状況ではないだろうか。「美術を通じた交流を促進する」「美術に対する理解と親しみを深める」「訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する」の3つの使命が果たせなくなるとは、本末転倒である。美術館の3つの使命を果たすためには、今後きちんとした予算化が図られなくてはならない。		
小島委員	B	・職員の業務上でのタクシー利用は認められているのか。		
原田委員	B			